Osaka University Knowledge Archive

Title	石田潤一郎・中川理編『近代建築史』
Author(s)	藤田, 治彦
Citation	デザイン理論. 1998, 37, p. 108-109
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52854
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

石田潤一郎・中川理編『近代建築史』

昭和堂　1998年　230ページ

藤田治彦／大阪大学

「地球が丸いことを我が目で確かめるためには，人間は宇宙空間まで離れる必要がある。過去のできごともまた，時間が経過したときにこそ，われわれの前に全貌を示してくれる。今，進行している事象がどんな意味をもっているのか，ほんとうのところはだれにも判らない。近い過去を対象とする歴史研究がむつかしい理由はそこにある。」（『近代建築史』はしがきより）

近過去を対象とする歴史研究者が地球を相手に近代史を著そうとするとき，この国では一層の困難があるように思う。欧米で書かれる近代史も，欧米だけを大きく取り上げ，いびつな地球を描いているのが常だが，それでも膨張している部分が大西洋周辺に限られているだけ，まだわかりやすい。日本でそれをやると丸い地球に突起がふたつできてしまい，これが地球か，という結果になる場合が多い。そのような困難にあえて挑戦したのが本書である。全体の構成は次のようになっている。

Ⅰ　産業革命と建築
　── 工業化時代の建築と技術 ──
Ⅱ　日本における西洋建築の受容
Ⅲ　都市の近代的再編
　── 都市改造と都市計画 ──
Ⅳ　19世紀末の造形運動
Ⅴ　前衛の運動
　── 未来派，ロシア構成主義，
　　デ・ステイル ──
Ⅵ　表現主義の建築とその時代
Ⅶ　アメリカにおける近代建築の形成
Ⅷ　近代主義建築の成立
Ⅸ　近代建築運動の拡がり
Ⅹ　歴史様式とアール・デコ
Ⅺ　近代主義の成熟と変容
Ⅻ　近代への懐疑 ── 地域，環境，伝統 ──
XIII　建築のポスト・モダン

日本の近代建築は，前から順に，第Ⅱ章の全部，第Ⅲ章の一部，第Ⅵ章の一部，そして，やはり一部ずつではあるが，第Ⅸ，Ⅹ，Ⅺ，Ⅻ，XIII の後半の5章すべてにおいて扱われている。つまり，根となる第Ⅰ章で西洋を扱ったのちに，第Ⅱ章のすべてを日本にあて，それ以後の幹の部分では西洋に所々日本を交え，後半では枝葉が大きく拡がるように毎章，多かれ少なかれ，日本の近代建築に関する記述を入れるという構成になっている。従来は，欧米の近代建築と日本の近代建築をはっきり分けてしまい，第1部が欧米，第2部が日本，といった構成を採用する近代建築史のほうが好まれた。執筆あるいは編集する側にとっても，どこに日本の何を入れ，どうやってそれを再び西洋の話に戻すか，などと迷う必要がなく，それが安全確実な構成だったのだろう。

第Ⅲ章では，エベネザー・ハワードらの田園都市に続いて，大阪や東京の郊外住宅地開発が紹介されている。第Ⅵ章では，分離派建築会などを中心に，日本における表現主義建築の消長が詳説されている。本書全体のヴォリュームからすればやや大きすぎるかと思われるほどだが，この日本の表現主義としか呼びようのない思潮は，日本の近代建築にとって重要な意味をもっていた。第Ⅸ章では，その章タイトル通り，ごく自然な形で「日本の

近代運動」として，その他の諸国の近代運動と比較しながら，日本の動向が概説されている。第X章ではモダニズムとしては記述しきれない両次大戦間の近代建築が考察の対象とされている。なかなか書きにくい部分であると同時に，重要な一章でもあろう。欧米も日本も，近代建築から一気に戦後の現代建築へと移行したわけではない。先日，両次大戦間をおもな活動時期としたある建築家の書斎を訪れ，その蔵書を見せていただく機会があったが，あらためてそのことを強く感じた。あのころの建築家は，この平成の時代に生きる私たちよりも海外の情報に敏感だった。多くの建築家が，勉強好きな人ほど多数，イギリス，フランス，ドイツ，そしてアメリカの建築雑誌を定期購読していた。そして，それらの雑誌はいわゆるモダニズム建築だけを掲載していたのではまったくない。むしろ，モダニズムは例外で，ほとんどは第X章で扱われているような近代建築を毎号毎号紹介していたのである。

全体を通読してみると，例えば，ヨーロッパのアール・ヌーヴォーやゼツェッションから，武田五一が登場するまで，結果的に100ページほどの紙数が費やされ，時代が前へ後へと行き来しているように感じられる部分もあるのだが，それは上述のような大きな骨組み作りのうまさからすれば，小さなことだろう最後の数章では，日本の現代建築についての記述が大きな割合を占め，まさに，大きく拡がった枝葉に花を咲かせる印象である。

本書は40歳代半ばまでという若い（ただし知識豊かな）研究者たちによって執筆されたものだが，現代建築に主体的興味をもった一層の若手を加えることによって可能になった全体の仕上りであろう。やや手放し気味の現代建築評価かなと感じられる読者もあるかもしれないが，建てて初めて成り立つ建築史である。現代建築になるにつれて次第に大きくなる日本の扱いは，本書の編集上の特徴のひとつであると同時に，日本の経済成長の反映でもあった。環境的に問題となるプロジェクトを手掛ける建築家は残念ながら多く，その辺の批判も重要だろう。ただし，木を枯らしてはいけない一方，枯れ木に花を咲かせるぐらいの努力が必要なことも事実である。そのような思考形態が有効なのか，もはや無効なのか，結果はまだ見えてこない。これは，学としての近代建築史のジレンマである。「建築を学ぶ一環としての近代建築史は，認識のための学であるとともに，蓄積されてきた造形言語を知り，価値観のありように目を開くという実践的な役割も担っている」と『近代建築史』のはしがきは述べている。

紙数の制限もあり，欧米の近代建築を扱った部分それぞれについての紹介はできないが，本書の充実ぶりは，主要国だけではなく，それ以外の世界各国の近代建築の歴史を専門とする若い研究者が次々と現われることによって可能になったものでもある。本書ではその近代建築の全貌を示すという役割上，それぞれの研究者に，その力を充分に発揮する紙数を与えるわけにはいかなかっただろうが，豊富な知識と実地の体験に裏打ちされ，各章はそれだけ濃縮された概説となっている。

編者が「はしがき」で述べているように，工業化社会の出現によって成立した「近代建築が包含している発見性と独善性」，それがもたらした「精華と破綻」，そして複雑で巨大な「昨日」の姿を，この若い世代が協力して書き上げた『近代建築史』は充分に描き出している。図版は鮮明でほどよくレイアウトされており，編者ならびに担当者の努力がここにも現われている。上記の編者を除く執筆者は，梅宮弘光，笠原一人，川島洋一，小林正子，末包伸吾，千代章一郎，田中禎彦，中嶋節子，本田昌昭の諸氏である。